

「実相を仮りて虚相を小説がどうしても実
実相に拠つて小説世

川嶋至 写し出す」という、二葉亭四迷の模写論を引くまでもなく、
相にかかわらざるをえないとすれば、
界に参入しようとした読者を、虚構という
たてまえだけを突きつけることによつて、拒否することはできないはずである。.....

事実とは復讐する

文学の虚実

「家相をやり、油相を
小説せう」とも実
家相に就て小説
なすまふけを著すつゆとなく、
相学もとはてまひはせぬ。

川嶋至

字しゆといふ。東京國學院大學を引くまでもなく、
相にかかわるをたひ、これは、
實に夢人しよくした虚をも、實といふ

事實は復讐する

文学の虚実

文学の虚実／事實は復讐する

定価二〇〇円

一九八七年五月一日 初版第一刷発行

著 者 川 嶋 至

発行者 森 下 紀 夫

発行所 論 創 社

東京都千代田区神田神保町2-19 細刈ビル203

電話番号 (〇三) 二六四—五二五四・五二三二

振替口座 (東京) 六一一五五二六六 千一〇一

印刷 光 邦

製 本 小泉製本所

©1987 KAWASHIMA Ivaru

落丁・乱丁本はお取替え致します

川嶋 至 (かわしま・いたる)
一九三五年、札幌市に生まれる。一九五八年、北海道大学文学部卒業。同大学院博士課程満期退学。日本近代文学専攻。在学中に、『位置』同人。岩手大学助教授を経て、現在、東京工業大学教授。著書に、『川端康成の世界』(講談社)、『美神の反逆』(北洋社)がある。

本書は、かつて『季刊藝術』に連載した「事實は復讐する」を一本にまとめたものである。今回上梓するにあたって、阿部昭「鵠沼西海岸」を削除し、同じころ『文学界』に発表した「平野謙論」を加えた。阿部昭論を省いたのは、この作家に対する心境に変化が生じたためであり、「平野謙論」を加えたのは、これが連載の趣意や方法を踏襲しているからである。

収録にあたっては、字句を修正する程度にとどめた。文中の現在時も発表当時のままである。その後新たに知りえた事実もあり、それぞれの作家・作品に対する考えに変化がないわけではないが、発表時に調べたさまざまな事實は、現在も変わることなく生きている。あえて修正を試みなかったゆえんである。

顧みると、「事實は復讐する」とは、われながらおどろおどろしい表題をつけたものだが、連載当初、私には事実の側から虚構である小説に照明を当ててみようという目論見があった。とり扱いは如何では、そこにとりこまれた事実が、小説の内的世界を崩壊に導き、ひいてはその作者に手痛い報復を企てることはないかというのが、あらかじめ用意した設問であつた。

しかし、虚構をたてまえとし、事実とはまったく次元を異にするものであるという、小説に対す

る認識を前提とすれば、私の用意した問い自体が無意味なものとなってしまう。むしろ小説の可能性は、ことばによる虚構性を信じきるところに拓かれると考えているが、この小説の公式が、公式として通用しているとはとうてい言い難いのが、現実の文学の動向である。その状況は現在もそう変っているとは思われない。

なぜ事実を小説に書くのが、そんなに恐ろしいことなのか。それは、書くことによって、切り裂かれた事実の何かが損なわれるからであり、同時に書いた者には、そのことに對する責任が生じるからである。書物のなかの事実、歴史のなかの事実もさることながら、日常生活のなかから切り取った事実は、対象が生身であるだけに、崩壊の過程も迅速であり、そのぶん書き手の責任も重い。

それは、小説家がいかに事実執着しようと、事実はいくまでも材料に過ぎないことと関係がある。事実は小説とかかわりなく、無意志的にそこに在るものである。それが、ひとたび小説の材料として選択切斷されれば、小説家の創造の意志によつてゆがめられてしまう。いかに記録性の強い作品といえども、ゆがめる必要がなければ、書き手は書く目的を根本のところで失つてしまったことになる。また、小説のなかでゆがんだ事実は、逆にとり残された事実強く作用しはじめることになる。

事実と対象の組み合わせを変えながら連載を重ねるうちに、事実は私自身の上にも重くのしかかつてきた。たとえば第Ⅰ章で教示を得た今井達夫氏や石山皓一氏に、原稿の段階で発表の了解を得たのも、両氏の名前を明記した文章が、現実面で何らかの影響を及ぼすことがありはしないかと惧

れたからである。多くの人々から貴重な話をうかがったが、その情報源を明かさずに立論の根拠とするのも、困難な作業だったと記憶している。

季刊雑誌に八回の連載が、三年余もかかったのも、あながち私の怠情のためだけとは言いきれない。連載の締め切りに合わせて、事実が都合よく姿を現わしてくれなかったこともあるし、発表にともなう諸影響を考えて、使用を断念した場合もあった。記録したもののほかは、すでにほとんど忘却のかたに消え去ってしまったが、往時懇切にご教示下さった方々への謝意は、今もあつくよみがえる。

連載中、第三回目に予定していた吉行淳之介論が未掲載となった。「闇のなかの祝祭」を妻草子の側にたつ祝座から論じたものだったが、今回読み直してみても、やはり発表されなくてよかったと思う。この場合を除けば、連載の内容について『季刊藝術』編集部からは何のクレームもつかなかった。自由活達な雰囲気雑誌で、文学関係の編集委員は江藤淳氏、編集長は古山高麗雄氏であった。今顧みれば、編集部に及んだ迷惑も相当なものだったであろう。遅ればせながら、『季刊藝術』の諸氏に深くお礼申し上げる。

連載中から、この論を単行本として出版する話があり、連載終了後も同じような話が兩三度あった。だが、どうしたわけか、出版の話はみな向こうからやってきて、向こうから沙汰やみになった。どうしたわけか、というのはひとつの修辭に過ぎないわけで、この論が出版になじまない事情について、およその察しはついている。この本を読めば、お分りいただけるはずである。

昨年末、一面識もなかった論創社の社長森下紀夫氏から手紙が届いた。出版の申し出である。出版事情のよくないこの時期にと驚いたが、森下氏の出版に対する情熱と独自の信念を傾聴するに及んで、ご厚意に甘えることとした。読者の協力を得て、論創社の負担が少しでも軽減されることをひとえに願っている。

一九八七年四月

川 嶋 至

目次

まえがき

歪曲された事実の傷痕 I — 安岡章太郎「月は東に」

1

言いがたき秘密住めり II — 高見順「深淵」

43

宿命からの逃避 III — 高見順「生命の樹」

79

ヒューマニズムと怯懦 IV — 大岡昇平「俘虜記」

121

裏切りの論理

V — 遠藤周作「沈黙」

163

プライバシーの侵害

VI — 三島由紀夫「宴のあと」

205

女房的リアリズムの源流

VII — 平野謙「なすなし」

253

事実と虚構との相剋

VIII — 現代小説の困難性

291

初出誌一覧

330

歪曲された事実の傷痕

I

安岡章太郎「月は東に」

「月は東に」の結び近く、主人公の宗太郎は、白昼のまどろみから覚めた一瞬、次のような光景を目のあたりにする。「河原一面が、まっ白なものに覆われている、それは累々と積み重なった白骨の山ではないか、どうしてこんなに沢山の骨があつまっただろう、上流から流れついた昔からの墓場の骨だろうか……」

宗太郎は愕然とする。むしろそれは一種の幻覚で、現実には日光を反射した「干上った川床のジヤリヤ砂」にすぎなかったのだが、彼の眼には瞬時、「白骨の山」と映じたのだった。宗太郎がここで「白骨の山」の白昼夢におののいたように、作者安岡章太郎氏も、小説家としてのひたすらな道程に、「累々と積み重なった白骨の山」を顧みたことはなかったのだろうか。

事実に執る小説家の切り拓いてきた道の辺には、小説に書きとられることによって無残に切り裂かれた事実の破片が、散乱している。ひとたび小説によって損なわれた現実には修復されるすべもなく、いわば「白骨」と化し、白骨と化してなおさやかな存在を主張し続けることで、わずかに小説に復讐を試みているのだ。

安岡氏が芥川賞を受賞したのは昭和二十八年。すでに二十年を超える作家生活であるが、登場期

にみせた旺盛な筆力も三十年代後半にはいると衰えをみせ、最近十年の小説家としての仕事は、四十二年発表の長篇小説「幕が下りてから」と、四十五年から翌年にかけての雑誌連載小説「月は東に」にほぼ集約された観があり、その他には作品集『走れトマホーク』（昭48刊）に収められた、九編の短篇小説を数えるのみである。「幕が下りてから」は『群像』に一挙掲載された作品だが、自筆年譜によれば、三十七年「花祭」発表以後、もっぱらこの長篇にとり組み、書き悩んでいたという。「幕が下りてから」と「月は東に」は、内容的に正統をなす作品とみてよく、安岡氏はこの十年、小説家としての情熱のほとんどすべてを、このひとつの題材に注ぎこんできたことになる。

「幕が下りてから」の主人公永野謙介は、雑文も書く当年三十七歳の新進挿絵画家である。妻耀子とは結婚してほぼ三年になる。郷里で母が狂死したあと、いったん謙介のもとに出てきた父は、妻との折り合いが悪く、ふたたび郷里に帰されている。戦後間もなく生活に窮乏した永野家は、K町で叔父から借りていた家の一部を、かつて画家の奥田欽一、睦子夫妻に又貸したことがあった。そのとき謙介は、睦子夫人とひそかな関係を持ったが、それも、結婚二年前には終っていた。再度の上京を知らせる父の手紙に困惑した謙介が、思案にあまって奥田を訪ねたとき、彼は不在であった。そこでまた奥田夫人との交渉を復活させるところで、作品は終っている。主人公の過去と現在を交錯させながら展開するこの作品から、奥田夫妻にかかわる部分を除外すれば、材料は昭和三十二、三年ごろの作者自身の周辺と、すでに他の作品に使われた過去からとられていて、中年の男が外ではジャーナリズムのなかで厳しい競争に耐え、内では妻や父との軋轢、情事等の問題をか

かえて生きていく姿が描かれている。

一方、「月は東に」の主人公は笠山宗太郎、四十歳くらいの文筆業者である。結婚して七年目、財団の招きで妻怜子とともに外国留学中であつたが、先輩片桐一彦にその妻房江との過去の情事が発覚したため、急遽帰国する。宗太郎は妻に悟られぬように何とか片桐の怒りを鎮めようとするが、やがて一件は妻に発覚、宗太郎の戦前からの友人で過去のすべてを知る早川俊作も、彼を裏切つてた。情事を公表すると強迫する片桐を訪ねた宗太郎が、奇妙な謝罪の儀式を終えて、茫然自失するところで作品は終つてゐる。つまり、この作品は明らかに「幕が下りてから」の情事の部分だけを継承展開させたものであり、登場人物たちの年齢や、現実の安岡氏のアメリカ留学の時期などとの照応関係から、作者自身の昭和三十五、六年ごろを現在時として書かれたものとみて、ほぼあやまりはない。では、この十年間小説家安岡章太郎を衝き動かし、創作にかりたててきた主題は、何だつたのか。人妻との情事という陳腐な素材に、執拗にかかわり続けることによって語らなければならなかつた、安岡氏のたぶん生理的な思想とでも言うべきものは、何であつたのか。

私が「幕が下りてから」に強く読みとつたものは、主人公の異常に肥大した均衡感覚であつた。それはたとえば、作品冒頭の文化人歌舞伎の場面で、マス・コミ界に占める自分の位置を、すばやく察知する敏感さとなつて現われてくる。謙介が客席の奥田夫妻に「何がなしにイタイタしげなものを感ぜ」たのも、奥田がすでに画壇では不遇であり、オチメであると判定したからであつた。こんな謙介だから、歌舞伎を観にきた妻が、「あたしみたいに何も知らないものにも、このなかで誰

がはやつてゐて、誰がオチメになつてゐるかつてことが、なんとなくわかつてくるんですもの」「おつかなくなつちやふみたい」と言つても、別にたしなめるわけでもない。いかなる社会にも生存競争があるのは当然だが、それだけで成立しているのではないこともまた真実である。だが、謙介はその特殊な局面に感応する触角が、異常に鋭敏なのである。

したがって、奥田夫人と交渉を持ったという過去が謙介に重くのしかかつてくるのは、「千里眼」的透視力を持つヒステリックな妻に過去を知られて、家庭の平和を乱したくないという気持もさることながら、奥田がこの事件を洩らすことによつて、謙介の職業的地位が崩れはしないかと怖れるからである。謙介はTRV編成局長でS新聞の出版局長も兼ねる野村に、大変気を遣つてゐるが、「奥田氏は野村がまだ戦前の新聞社で娯楽欄担当の駆け出し記者だつたころから知つてゐる。しかし現在の奥田氏は別段、野村とそれほどの交渉はないはずだ」と考える一方で、新聞社で見かけた奥田によく似た「黒いソフトを眼深にかぶつた男」に恐怖を感じるのも、情事が野村に知れて、ジャーナリズムの世界から葬り去られるのを、何よりも怖れてゐるからである。情事はそれにかかわつた人たちの、心の問題として扱われてゐるのではない。

「月は東に」では、この主人公の均衡感覚は、文筆業者としての地位保全、防衛のための不安感として現われてくる。宗太郎のもの書きとしての地位はすでに安定してゐて、外国から帰れば、出版関係からの挨拶の電話が絶えないほどに、多忙である。すでにふれたとおり、この二作の現在時は昭和三十二、三年から五、六年と推定されるが、この間、安岡氏は「海辺の光景」（昭34）で作

家としての地位を確立しており、謙介から宗太郎への意識の変化は、作者自身のそれとほぼ対応している。

この二つの作品からさまざまな爽雜物を取り去ったあとに浮かび上がってくるものは、華やかなようにみえても、浮沈明日をも知れぬマス・コミの世界に、「いつも何処かで他人を踏み台にした裏切ったりしなければ生き残れない」と考える、ないしはとしか考えられない主人公が、先輩の妻との情事の発覚に、みずからの地位を失うのではないかとおびえと惑う姿である。では、職業的地位の浮沈に対して過剰なまでのこだわりと不安を示す主人公が、この二長篇に登場するとしても、そうした潜在的不安をかきたてずにはおかない事件が、現実の安岡氏のものとしてあつたのだろうか。

これまで安岡氏は、肉親や友人たち、実生活で身近にかかわりを持った人たちを材料として、私小説ふうの作品を発表してきた。氏自身、「小説にモデルがあるかないかを訊かれるのは苦痛だ。私の場合、自分の体験の外側に材料を探すことはあまりなかったし、書いたものはたいいてい自分の過去の一部に、ひどく似たものになつてしまふ」（『ご対面』）とも、「自分が『私小説風』といわれる作品を書き出してからのことについて簡単に言えば、ともかくも私は自分の体験をたどつてみることで、作品の中にあるシンのようなものを見つけ出すことができるようになった」（『不精の悪魔』）と、語るとおりである。だが、この二長篇に情事が「シンのようなもの」として使われているのは確かだとしても、それが作者の体験の内側に求められたものかどうかは、不明と言わなければ

ばならない。

私がその点についてこだわるのには、それなりの理由がある。ひとつには、安岡氏がこの十年、この材料を核にした小説を書いてきたということにもよるが、これが事実であるとないとでは、作品の製作意図そのものが、かなり違ってくるはずだからである。作品に即していえば、情事の発覚を怖れる文筆家が、かりに安岡氏自身の重い分身であるとすれば、氏はこの作品を書くことによつて、秘すべきことをみずからの手で広く世間にあばいたことになる。それは主人公たちのもつとも怖れていたことではなかったか。とすれば、情事発覚への恐怖は架空のもので、作者の心情とはかわりのないことなのか。それとも安岡氏は、私小説伝統の告白性をふまえ、捨身の冒険にいいんだのか。

2

元『群像』編集長大久保房男氏は、「鰻」（安岡章太郎全集・月報）という一文で、「安岡氏がアメリカ留学から帰ってから少したった秋のこと」、電話で呼び出されて、吉行淳之介氏とともに安岡邸を訪れたときのことを回顧している。その際「安岡氏夫妻と四人でいろいろ話したのだが、会談中、夫人はたえずきびしく安岡氏を攻撃し、安岡氏は終始防禦の姿勢をとつていて、甚だしく不景気な様子」であり、やがて氏らが安岡氏を連れ出した車のなかで、「何気なく安岡氏の手首に視線

が行ったとき、そこに幾筋ものみみずばれを発見した。『お宅では猫をお飼いで?』という、いや、と言いかけた安岡氏は私の視線が自分の手首にいつているのを認めると、あわてて袖口を引っぱってそこを隠した」という。この安岡氏の手首の「みみずばれ」は、「月は東に」で情事が発覚したとき、宗太郎が狂乱した妻に「破れた甲の皮膚が白くなって血を滲ませるほど強く何度も掻きむし」られたことと、無関係ではないはずである。しかも大久保氏はこの一文を、「私たちがその日安岡邸で話しているうちに、いつしか安岡氏の助太刀になってしまったのだが、なぜ助太刀しなければならなかったかのそもそのことは安岡氏の『幕が下りてから』や『月は東に』に書いてある。だからそれらの作品については安岡氏の小説的変形の仕方と登場人物のモデルも少し私にはわかるのである」と結んでいるのである。

更にまた、安岡氏の古い友人、石山皓一氏の書いた全集月報の文章は、私にとって気がかりなことを、簡潔な表現のうちに捉えてくれていた。

「幕が下りてから」が受賞（筆者注―昭42・第二十一回毎日出版文化賞）するに先だって、一日奥野先生（筆者注―信太郎）が伊豆に移り住んでいるほくを訪ねてこられたことがある。先生はほくの顔を見るなりこう仰言った。「今度の賞には安岡のあれを推薦しておきましたよ」と。先生が日頃弟子をおもう念の厚いかたであることを忘れていたわけではない。しかしそれは、頭から先生の意見にほくが賛同するものと決めてかかっているような口ぶりであった。それだけにほく